



ア
メ
リ
カ
童
話
から
7

松原至大

うさぎの鼻はな

あるところに、十四の子うさぎを持つたうさぎの一家がありました。ある日のこと、お母さんうさぎが、このように申しました。

「さあ、しつかりと目をあけて、御自分のまわりにあるものに、よく氣をつけるのですよ。今日は森のこわい小人こびとが、食物を探していますよ。小人は、とてもうさぎのパイが好きなのです。お母さんがこういつても、お家には小人の食物にあけてしまうようないたずらものが、いるというのではありませんよ。」

こう言つてからお母さんうさぎは、子供たちをやさしく見まわしました。

「ねえ、ジャキーちゃん、あなたは特別、氣をつけなければいけませんよ。あなたはよく一本の足で鼻を暖めて、もう一本の足ですわる癖くせがありますから。」と、お母さんうさぎがいました。

「でも、ぼくの鼻は冷たいんだもの。」と、ジャキー君が答えました。

「わかりました。ではお母さんが、できるだけ早く鼻はな管かんを編あんであげましょう。けど、それができるまでは、よく氣をつけなさいよ。お顔をおさえていては、まわりになにかあるのか見えやしませんよ。お鼻が冷たくなつたら、お家の中にはいりなさい。」

「ほく、氣をつけます。」と、ジャキー君は約束をしました。そして小さなピンクの鼻に、しわをよせ七、お母さんにキスをしてから、朝の食物を探しにとんで行きました。

ジャキー君は、雪が好きでした。よく雪の中にすわつてみると、やわらかな白い尾をつけた小さな灰色のものが、一匹の子うさぎであるのか、それともなにかほかの影なのか、見わけのつかないことがあるのでした。

その日も前の晩に、雪のやわらかな毛布がしかれてあつて、ジャキーは大喜びでした。おもしろい小さな足跡をうけたり、こんな楽しい歌をうたつたりして、とびまわりました。

「おや、おや。」

おや、おや。

うさぎのペイなんかには、

なりたくないよ。」

ジャキーは、おなががすいていました。皮をかじつて、木から木へ移りました。はねたり、食べたり、うたつたり、とんだりしました。すつと前から、ジャキーの鼻は冷たくなつていきました。けれども、お家にはいるのがいやでした。お母さんが早く、鼻營はなもとを編み終ればよいなと思ひました。

「ジャキーちゃん」と、兄さんの一人が言いました。「君、お家へ行つて、鼻を暖めた方がいいよ。」

「そうだね。」と、ジャキーは言いましたが、そうはしません。鼻はますます冷たくなつて、もうぢつとしていることができなくなりました。

「ほく、ちよつとおさえていよう。だれも来やしないや。」

そこでジャキーは、雪の中にすわつて、一本の足を冷たい顔にあてました。そのうちに疲れがでてきて、眠つてしまいました。

ちようどその時、森の小人がそのそと歩いてきました。ジャキーを見つけると、すぐに立ちどまりました。「やあ、おもしろい影だな。鼻の上に足を一本のせて、うさぎが眠つているようだぞ。」と、小人が言いました。する

とジャキーが動いたので、小人が叫びました。

「やつ、うさぎだ。」

この聲を聞いて、ジャキーはとび上つて、兄さんと姉さんたちを探しました。けれど、だれも見えないのでした。ジャキーが逃げ出そうとすると、小人はとてもしばやいのでした。ジャキーが、あつと思つた時は、もう自分は小人のとながり帽の中に入れられて、森を運ばれて行くのに気がつきませんでした。

「お前を見ると、おなかの虫が、くうくう言うよ。お前をつかつて、どんなおいしいパイができるかな。早くお家へ連れて行つて、夕食にしよう。」と、小人はとんがり帽の中の子うさぎをのぞいて、意地悪そうに言いました。

小人は子うさぎをかかえて、森のはずれの小屋にもどりました。裏口の階段をのぼつて、くつをぬぎました。

「ああ、どんなパイができるかな。」と、小人がまた言いました。「わしが、火をおこす間、この裏口にお前をおいておこう。ここは仕切りがしてあるから、外には出られないよ。」

ジャキーの小さな心は、しよげてしまいました。ジャキーは、小人の夕食などにはなりたくないのでした。ひとりぼつちになると、小つぶの涙がぼろぼろ鼻の上に流れました。

しばらくの間、そこにすわつて、お母さんうさぎのことを考えていました。いつもお母さんが、目を大きくあけて、あたりのことに氣をつけなさいよといつたことを思い出しました。そこで、あたりの様子をながめました。

仕切りに穴まながあいてはいないかと探しました。けれど、穴はありませんでした。ジャキーは、自分で一つ穴をあけてみようと思いました。だが、歯が小さすぎて、だめでした。しかたがないので、眠ろうとしました。だが、心配で眠れません。その上、あかりが目につりました。もつといけないことには、また鼻が冷たくなつてきたのです。

ジャキーは、はねてみました。すると突然、今までに見たこともない二つのものが現れました。それは變へんなものでした。なんといつてよいかわからないので、ジャキーは「二つのなにか」と名づけました。それは、戸のそばにあしつたので、ジャキーは、においをかぎました。足でさわつてみると、かたいので、兩足をその中に入れてみました。

おや、でもそれは、きれいで、暖かでした。まるでうさぎのお家の穴のようでした。冷たい鼻を入れるにはまこ

とにおあつらえのように思えました。そこで中にとびこんで、からだをまるめました。もしもジャキーが、パイにされようとするならば、よい氣持でパイになつたかもしれません。

しばらくすると、戸があいて、小人が出てきました。小人は、あたりを見まわしました。幾度も幾度もながめました。でも、ジャキーはおりません。小人は、そんなはずはないと思いました。

「仕切りに、穴などありわしない。でもどこからか、逃げたんだな、中庭にいるかもしれない。もしそうだったら、そこには足跡があるだろう。それをつけて行つて、つかまえよう。」と、小人はぶんぶんになりました。

小人は、くつを手にとつて、それをはこうとしました。ああ、ところが、小人はまたぶんぶんになりました。うさぎの背中をはこうとしたからです。けれどもその時、ジャキーはとび出しました。子うさぎでは、これ以上早くは走れないという早さで、逃げ出したのです。お家の近くにいくると、少し早さをゆるめました。そして間もなく歌いはじめました。

「おや、おや。」

おや、おや。

うさぎのパイのそばなんか、

シューズをぬぐんじやないよ。」

それからジャキーは、うさぎのお家の中にはいつて、お母さんうさぎに今までのお話をいたしました。お母さんはとても驚いて、すぐその日の午後に赤い毛糸の鼻當を編んで下さいました。けれど、もうその入用はなくなりまして。ジャキーは、鼻が冷たくなると、いつでもすぐに暖かなお家へ歸りましたから。(アナ・フアリス女史の作による)